

## 第7回 チェンバース・ワークショップ

### - バイアスにとらわれない -

「ジェンダーと開発」修士課程で学ぶ日西真理です。先日 IDS で行われたロバート・チェンバースのワークショップの感想をお伝えします。彼の名は、開発学に興味をもたれている方にはおなじみだと思います。彼の提唱した PRA (participatory rural appraisal 最近では participatory reflection and action ともいわれます)の主旨は、貧困にある人々が自らを分析し、自分達の現実を共有することで、より主体的に開発過程に参加するということです。それは従来行われてきた開発方式とは逆方向であり、今まで主導権を握っていた開発プランナーは現地の人々から学ぶという姿勢が問われます。

今回のワークショップのタイトルは「季節性 と貧困 (seasonality and poverty)」で、休憩を入れて午前9時より9時間行われました。参加学生数は約40人ほどに制限され、多すぎず居心地のよいものでした。チェンバースが、ジェンダー専攻の学生をこのワークショップに参加させたかった理由には、開発過程でジェンダーの視点が抜け落ちることが多いからだと思います。

午前中は、開発における力関係、貧困にある人々の現実、財産としての健康と体についてでした。特に印象的だったのは、バングラデシュの貧困都市に住む女性が求めているもの3つについてでした。一つ目はわかりやすいもので、水です。しかし、残りの二つは予測することが難しく、多くの学生が答えられませんでした。それは、娘が結婚するときの持参金 (dowry) と個人的な浴室でした。バングラデシュでは、持参金が非常に重要で (最近政府が違法にしたそうです)、またその貧困地区では女性が個人的に体を洗う場所がないという背景があります。開発プランナーが思い込みがちな偏見から実際の現地の人々のニーズを理解する大切さを学びました。

また、健康と体についても見落とされやすいもので、学生は、グループに分かれ (ジェンダー専攻の学生が二人ずつ各グループに入りました)、身体的病弱、物質的不足・貧困、社会関係の悪さ、力の欠如、不安定 (insecurity) という5つの要素の関係について話し合いました。このとき、夫からドメスティック・バイオレンスの被害にあっている女性に、ひと月にどれだけ夫から殴られたかを表につけてもらうことで、字のかけない女性に客観的・数量的に被害を自己認識してもらうというビジュアル・ダイアリーについての説明がありました。ここで興味深かったのは、アフガニスタンでの現場経験があるジェンダー専攻の学生がした彼への質問です。それは、夫、義母等の親類、コミュニティからの社会的圧力が強いアフガニスタンの女性が真実のビジュアル・ダイアリーをつけることができるかというものでした。おそらく、圧力が強すぎて本当のことはかけないのではないかという問いでした。

ジェンダー問題を学ぶとき、地域的・社会的なコンテクストは非常に重要です。女性は自らの利益 (interest) を個人的なものにと捉えるとは限らず、家族・親戚・コミュニティ等との社会的関係を考慮した上での利益 (戦略といえるかもしれません) を考えて行動することがよくあるからです (そのとき不公平なジェンダー間構造自体は変わらないことが多い)。また、家庭における女性とその夫の力関係をどう

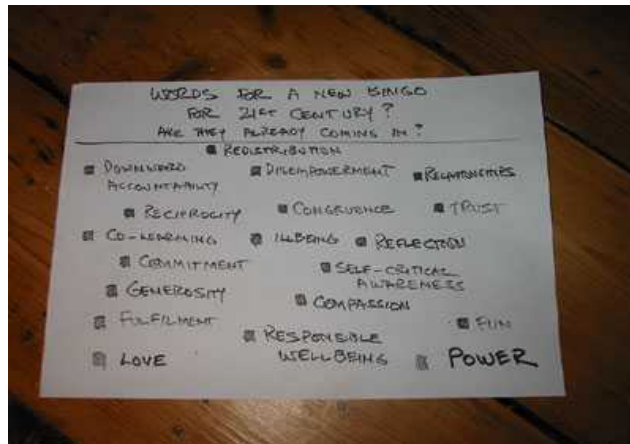
捉えるかで、女性へのエンパワーメントの意味が異なってきます。

午後は、熱帯地方における季節性とその日のワークショップについての熟考時間(reflection)でした。季節性に関しては、例えば統計では、ある地域においてマラリアは雨季の間に多いとなっても、実際には雨季の後に多く、簡単に統計を信じるのではなく、その背後にある現実を捉える重要性などについて話しました。

全体的に彼が考えさせたかったことは、開発過程において私達は偏見をもたず、より多様な視点(力関係、地域性、ジェンダーの視点等)をもつということだと思います。それは最底辺にいる弱者から(人間だけでなく動物や環境も含まれるでしょう)の視点ともいえると思います。

2003年12月14日

ジェンダーと開発修士課程 日西真理



チェンバース直筆21世紀に流行する(かもしれない)開発用語集！  
(ディスエンパワーメント、信用、調和、寛容、愛など)